丘陵地に沿って広がる茶畑（菊川市吉沢）

風景の句読点 Punctuation of Scene 第12回

株式会社ニュージェック／地圏グループ
高見 元久 TAKAMI Motohisa（会誌編集専門委員）

小笠茶産地

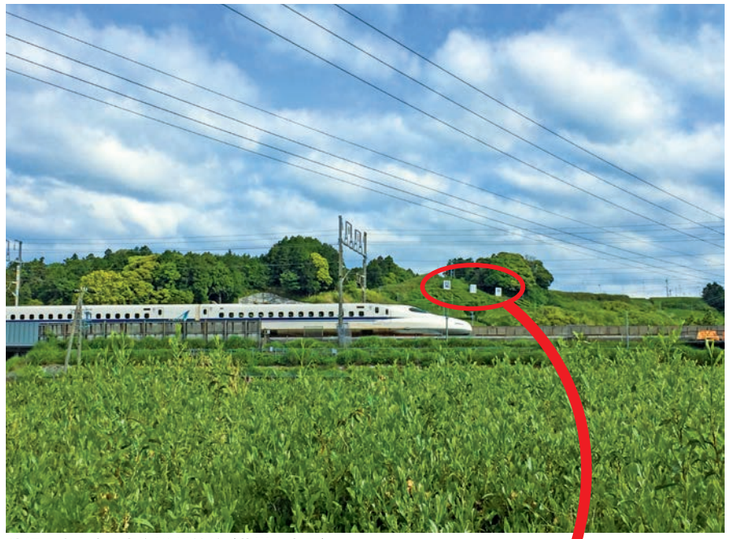
新幹線の車窓から眺める「小笠茶産地」（静岡県牧之原台地）

茶どころ「静岡」

東海道新幹線で東京方面から静岡県に入り、三島駅を過ぎると茶畑が見え始めるが、茶畑が広がる光景と言えばやはり大井川を越えて、掛川に抜けるまでの辺りであろう。島田市、牧之原市、菊川市、掛川市にまたがる牧之原台地は茶の生産量が多く、まさに「小笠茶産地」、茶の本格的産地である。

茶の木の畝が丘陵地一面に整然と配され、茶畑のあちらこちらに防霜ファンが立ち並ぶ。節分から八十八夜を過ぎた4月下旬～5月上旬あたりが新茶の収穫期に当たり、新緑が最も美しい時期でもある。緩やかな畝の起伏が遠近感を強調し、どこまでも茶畑が続くのではと錯覚する。

「風景の句読点」は、私たちの心に句読点を打ち、思わず足を止めたくなるような素晴らしい風景について、その成り立ちや魅力の源泉を紹介するコーナーです。



茶畑の中を走る東海道新幹線（菊川市友田）

牧之原台地の茶畑

江戸時代までは未開拓の原野が広がっていた牧之原台地で、茶栽培が盛んになったのは明治以降である。武家社会の時代が終わり、生活の生業を農業に求めた徳川慶喜の家臣たちが牧之原台地に入植したことが大きい。水資源に恵まれず、畑作には不向きな土地であったが、苦労を厭わずに開墾を進めた熱意に加え、丘陵地の日当たりの良さや適度な寒暖差等が茶の木の栽培に適していたことも遠因であろう。

茶の木で書かれた『小笠茶産地』の文字

一番茶は若芽の先端部を主として手で摘み採るので茶畑は緑のままであるが、大量に葉を収穫する際には動力付きの刈取機を使い、畝をまたいで葉を全て刈り取ってしまう。そのため、新たな芽が伸びるまでしばらくの間、茶畑は茶色に変貌する。その後、初夏から盛夏にかけて成長すると葉の色はいつの間にか濃緑色を帯び、茶畑の風情に落ち着く。

茶文字で描く『小笠茶産地』

東海道新幹線は大井川～掛川駅間で複数のトンネルを通過する。このうち、東海道本線と立体交差するトンネルとトンネルの合間の数秒間に広がる景色のなかに、丘陵地の斜面に茶の木を使って描かれた『小笠茶産地』の文字を見たことはないだろうか。

昭和初期、当地の名産茶を知ってもらおうと東海道本線からよく見える丘陵地斜面に茶の木を植えたもので、一文字の一辺が約10m、全体で60mほどになる。現在、地元茶業協会やNPOの手により維持管理されている。

右から読む茶文字は、ローカル列車からは程よく読めるが、新幹線のスピードはトンネル間の数秒で文字を読むにはいささか速すぎるだろうか。ご存知ない方は一度挑戦してみては。